

勝林寺寺報

親鸞さまの和讃

お詫びされながら、おしえをお説きになつたのはまだ文字のない時代でした。だからお弟子たちは聞いたおしえを覚えやすい「うた」にして覚えまた伝えてきました。ガータとか「伽陀」とか「梵唄（ボンバイ）」「梵讃」と云います。

中国や日本でも仏教関係のうたを漢文で唄われました。「漢讃」「偈頌（げじゅ）」といつて流行しました。親鸞さまも若き日、比叡の山での修行中、かなり専門的に梵唄（ボンバイ）というかたちでこの訓練をされたようです。わたしたちに馴染みの「正信念仏偈（もの）」偈頌（げじゅ）の一つです。しかし这里是、インドの梵音であつたり漢文であるので、一部の学者か学僧には理解できても一般庶民には分かりません。それに対して「和讃」とは日本語にヤワラゲてみんなで唱和（和してうたう）歌ですし、そして褒め讃える歌にしたのがそれがこの「和讃」です。日本では仮名文字が庶民の間にも流行しました。平安末期ごろから行われ始めました。みなさまご存知の「いろはうた」等です。

親鸞さまは六十歳過ぎに京都に帰られてから歌われた和讃はザット五百五十首を越えます、「淨土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」の三帖和讃のほか聖徳太子関係・善光寺関係のもの、また帖外和讃をふくめて膨大な数のうたを歌っています。しかも親鸞さまは、難語には「左訓」といって一々その意味を丁寧に書き添え、清濁を示す符号、平仄（ヒヨウソク）といった音譜まで丁寧にしめして、みんなで唱和できるよう細かな配慮がしてあります。八十八歳、ご往生の間際までうたい続けられました。

七五調四行。「今様」というのは万葉以来伝統の、主に貴族社会で唄われたものとは違い、當時、最も社会

の底辺にくらしていた庶民の難渋な暮らしの歌です。親鸞さまは『歎異抄』第一條にあるよ

うに、「罪惡深重・煩惱熾盛（ほんのう・しじょう）の衆生」とともにお念仏ご本願を信じ樂（しんげう）されたのでした。

お正信偈のあと唱える、馴染みの6首を解説してみましょう。

弥陀成仏のこのかたは
今に十劫を経たまえり
法身の光輪際もなく

世の盲冥を照らすなり

十歳のころ眼科手術を終えたわたしを背負つた小柄な母が、繰り返し繰り返し、お念仏申しおながら子守歌のように唄つてくれたご和讃です。

わたしたちの如来さまを讃える歌です。

「弥陀如來」の如來とはタッターカ。タットハ・ガーターというインドのことばを音訳しました。「如より來生す」とも云われて、私につねに働きかけているほとけさまで。

この仏様は、あなたをお淨土へ迎えとらなければわたしはほとけとは呼ばれませんの誓い

を建ててから今日まで「十劫」。一劫というものは時間の単位で、三里四方の岩を、天女が三年に一度降りてきてその薄い衣で撫でさすり岩が擦り減ってしまうまでの時間だそうです。

そんなに遠い昔からずっとたえまなくわたしに寄り添い、その如來様のはわたしがどこで何をしていても「世のなかの盲冥」。

（敬称略）

勧修

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要

一〇月 勝林寺 予定

勝林寺ご門徒の皆さんのお惠とご淨財とそし

てご奉仕のおかげをもちまして、晴れ渡る青空の下、大遠忌法要をおつとめすることができました

当曰は、町内・親戚のご住職十七名のご出勤をいたしました。四十名の子どもさんとともに行

った稚児行列は厳かな中にもほほえましく、親鸞聖人の喜んでくださるお顔が浮かぶようでした。

出石小唄に合わせて踊りも花を添えていただきました。青空と衣装の青が一体となつて、それはそれは美しい光景でした。

美しく整えられた本堂での法要は、一五十年に一度」というにふさわしい厳肅なものでした。永代経に引き続ぎ縁をいただいた吉峯先生の記念法話は、親鸞聖人の残してくださった足跡をたどりつつ、これからを生きる私たちに指針を与えていただきました。

ご満座のお斎（祝賀会）では、お弁当に手作りのお漬物、煮物、デザートなどを添えていただき、当日携わっていただいた役員の皆さんの疲れを癒すことができました。

誰か一人の力が足りなくともこの法要を勤めるることはできませんでした。皆さんで作り上げていただいた法要であったと思います。皆でこの喜びを分かち合い、次の五十年後へのスタートといたましょ。

なお、法要の記念品として、各戸に聖典とお經

さんのおCD（住職・若院・坊守の声入り）を用意させていただきました。近日中に代議員様よりお配りいただきます。お役立てください。

葬儀
平成二十五年九月二十三日
江本 大石寿子様 六十歳

親鸞さまは六十歳過ぎに京都に帰られてから歌われた和讃はザット五百五十首を越えます、「左訓」といって一々その意味を丁寧に書き添え、清濁を示す符号、平仄（ヒヨウソク）といった音譜まで丁寧にしめして、みんなで唱和できるよう細かな配慮がしてあります。八十八歳、ご往生の間際までうたい続けられました。

七五調四行。「今様」というのは万葉以来伝統の、主に貴族社会で唄われたものとは違い、當時、最も社会で唄われたものとは違いました。

お詫びされながら、おしえをお説きになつたのはまだ文字のない時代でした。だからお弟子たちは聞いたおしえを覚えやすい「うた」にして覚えまた伝えてきました。ガータとか「伽陀」とか「梵唄（ボンバイ）」「梵讃」と云います。

中国や日本でも仏教関係のうたを漢文で唄われました。「漢讃」「偈頌（げじゅ）」といつて流行しました。親鸞さまも若き日、比叡の山での修行中、かなり専門的に梵唄（ボンバイ）というかたちでこの訓練をされたようです。わたしたちに馴染みの「正信念仏偈（もの）」偈頌（げじゅ）の一つです。

しかし这里是、インドの梵音であつたり漢文であるので、一部の学者か学僧には理解できても一般庶民には分かりません。それに対して「和讃」とは日本語にヤワラゲてみんなで唱和（和してうたう）歌ですし、そして褒め讃える歌にしたのがそれがこの「和讃」です。日本では仮名文字が庶民の間にも流行しました。平安末期ごろから行われ始めました。みなさまご存知の「いろはうた」等です。

親鸞さまは六十歳過ぎに京都に帰られてから歌われた和讃はザット五百五十首を越えます、「左訓」といって一々その意味を丁寧に書き添え、清濁を示す符号、平仄（ヒヨウソク）といった音譜まで丁寧にしめして、みんなで唱和できるよう細かな配慮がしてあります。八十八歳、ご往生の間際までうたい続けられました。

七五調四行。「今様」というのは万葉以来伝統の、主に貴族社会で唄われたものとは違いました。

お詫びされながら、おしえをお説きになつたのはまだ文字のない時代でした。だからお弟子たちは聞いたおしえを覚えやすい「うた」にして覚えまた伝えてきました。ガータとか「伽陀」とか「梵唄（ボンバイ）」「梵讃」と云います。

中国や日本でも仏教関係のうたを漢文で唄われました。「漢讃」「偈頌（げじゅ）」とい

お釈迦さまの教えと親鸞さま

お釈迦さまが亡くなれようとしたとき、お弟子たちが、これから私たち何を頼りにしたらよいのでしょうかと嘆き訴えました。

「私が死んだからと云つて嘆くではない」といつてお釈迦さまが示された言葉。

後々の学者は「自灯明 法灯明」という熟語で伝えてきましたが、實は古い經典によりますと

「自らを洲瀬（河の中洲）として、他を洲瀬としてはいけない。法をより所にして他をよりどころにしてはならない」。

「いまここにこのように生きているわたしを見失ってはいけない。そこを踏まえたうえでわたしの説いた真理（法）を学びなさい」

それは、仏道を習う第一段階は「自己を習うこと」だ。終局それが「万法に証せられている」わたしを発見することと教えた昔の禅師のことばにも一貫する。

また、日本に釈迦の教えを伝えた聖徳太子はそのご持言（ジゲン・常々のことば）としてその後「橘の夫人」は、手織の繡帳「天寿国曼陀羅」に「世間虚偽唯仏是真」と織りこんでいる。

とかくわたしたちは自分のことは横において、ただ理屈の上で考えてしまうのだ。

自分のことはさて置き人をあれこれ論じ批判したほうが生きるには楽だ。だがそれでよいのだろうか。

太子とともに苦惱の人生を生き抜いた親鸞さまも

煩惱具足ノ凡夫 火宅無常ノ世界ハ ヨロズノコト ミナモツテ ソラゴトタワゴト

マコトアルコトナキニ、タダ念佛ノミゾ マコトニテオワシマス

（「火宅無常の世界」というのは法華經のなかに、人の世は、火炎に包まれているのに子供たちはその危険を知らずに遊んでいるようなものとの譬え）

という「常の仰せ」を、唯円は『歎異抄』の跋文に書きとめている。

我が身の現実から眼を逸らし、抽象的な議論や学問に走るわたしたちへの厳しい警告と聞かねばなりません。

ついでながら、いま国際的な争点になつる「歴史認識」も大切なことです。

八紘一宇・皇威宣揚・金鷄輝く日本と、伝統的独善的侵略理論をかかげ「大君の辺にこそ死なめ返り見はせじ」と国民を鼓舞した戦いのなかで、チャンコロを、チョウセンを、大量殺戮蹂躪したあの昭和初期からの殺伐な戦争経験を消し去つてはならない。

南京大虐殺の生々しい絵葉書や捕虜の惨殺場面の写真。全裸で号泣の中国婦人の写真を、復員戦士から誇らしく見せられた幼年期の思い出を消し去ることは出来ない。また、日本の軍隊のなかで朝鮮人の人々がどんなひどい扱いを受けていたか、記憶している人は、全然出てこない。

そんな恥すべき日本の歴史を忘れてはいけない。虚偽不實な日々を生きている私に眼をつむつてはいけない。否応無くそこに日々を生きている私を悲嘆する中でこそ、如来の大悲に出会つていったのが晩年の親鸞さまでありました。

『愚癡悲嘆述懐』（正像末和讃）の内に十六首に、この述懐

十月二十六日土曜日十一時より
敬老報恩講にお参りください

（後略）

恒例の敬老報恩講を開催いたします。今年も仏事仏婦役員一同精一杯のおもてなしをさせていただきます。迎えのバスを用意して、一人でも多くの参加をお待ちしております。お誘いあわせの上、お参りください。お待ちしています。

役員一同

外儀のすがたはひとことに 賢善精進現ぜしむ。貪瞋邪偽おほきゆえ、奸詐ももはし、身に満てり。

悪性さらにやめがたし、心は蛇蝎のことくなり。修善も雑毒なるゆえに、虚偽の行とぞ名づけたる。

無慚無愧のこの身にて、まことの心はなけれども、弥陀廻向のみ名なれば、功德は十方みちたもう。（以下略）

とすん

永代經で吉峯先生から聞かせていた
だいたお話の中に、人間の欲はとどまる事のない深いものであるとお聞か
る事のない深いものであるとお聞か
せいただきました。たとえば、何か催
しもののあるとき「晴れるといいな」
と思ひます。晴れたら晴れたで
ないほうがいいな」と思い、さらに「ど
きおり風がふくといいな」などと思ひます。まさ
にこの度の大遠忌法要を迎える前の私の心境で
した。その欲が深ければ深いほど、なし得なかつたときに抱く怒り・嫉み・憎しみもまた深くなり、
それが、人間の煩惱であるともお話されまし
た。私は、できれば煩惱を抱かず暮らしたいと思
います。そして、それは、私の心もち次第ででき
るのではないかとも思いました。

法要前この話を思い出し、「欲を捨てよう」と
思ひ、まずは、お天気について、晴れたらそれに
こしたことではない、でも、雨になつてたとえ行列
ができるなくともお稚児さんのかわいさは変わ
ることはないし、法要をお勤めできる喜びにかわり
はないあるがままを受け入れる覚悟で毎日を
過ごしておりました。

しかし、当日がだんだん近づき、長期予報が晴
れと告げるとやはりにんまりしていける自分がい
ます。ガツツポーズをしたくなる自分がいます。
そして、当日、晴れ渡る青空の下で稚児行列がで
きたとき、この上ない喜びを感じました。雨が降
つても同じ喜びが感じられただらうか。。。た
つたお天氣ひとつをとつても「この通り！」欲を捨
てることは心もちひとつでできるような簡単な
ものではないと気づかされました。

欲を捨てるのできない私は煩惱まみれの
凡夫にほかなりません。自分の力で仏とならせて
いたぐことなど到底できないのです。そんな私
を阿弥陀様はいつでもどこでも願つてくださる
と私たちに伝えてくださった親鸞聖人の遺徳を
たたえた大遠忌法要でした。（文責 坊守）